慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国経済史に関する新刊書若干
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.7 (1933. 7) ,p.993(107)- 1003(117)
JaLC DOI	10.14991/001.19330701-0107
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330701-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國經濟史に關する新刊書若干

野村兼太郎

英國に於ける經濟史の研究はその後益〻隆盛である。殊に自國の各産業部門に關する研究は新資料の發見と共に、次第に細密に亘りつゝある。今こゝに一九三一年以後刊行された單行本で、私の一覽し得たものを幾つか、極めて簡單に紹介して置かうと思ふ。中にはかなり以前に一讀したまゝのものもあるから、記述の不十分な點もあらうが、偏に讀者の寛恕を祈る。

Wray Hunt, Growth and Development of The English Town, 1931, P.P. 256.

本書は學術的述作ではない。The Simple Guide Series と稱する通俗的叢書の一つである。從つて都市發達に關する理論的歸結をこれから求めることは無理である。しかし從來の都市史は多く無味乾燥であり、又多くある一都市のある時代を記述したものに過ぎない。勿論一都市にして古代から現代まで典型的な發展を續けてゐるものはないからそれが當然であらう。本書はノルマン人の英國征服以前に筆を起し、現代にまで及び、それぞれの時代の典型的な都市生活——と云ふよりも人間の集團的生活と云ふ方が精確かも知れない——を描寫してゐる。記述は頗る文學的で、先づ厭きずに一讀し得る。加ふるに多くの挿繪は興味を助けること大である。

L. F. Salzman, English Trade in the Middle Ages, 1931, pp. xii., 464.

同氏の著、English Industries of the Middle Ages, 1923 の姉妹篇である。中世の終末をエリザベス女王即位の年にして、かつ英國がカレヱを放棄した一五五八年になしたのは妥當である。全體を二十の章に分けてゐるが、一から三までは商業要具として、貨幣、信用、度量衡を論じ、四から九までは商業の中心を、第十から十三までは交通運輸機關を、十四以下外國貿易を說明してゐる。本書は所謂學究的著述ではない。多くの挿繪を入れ、一般讀者にも興味を有し得るやうに努めてゐる。しかしかなりの程度まで原資料を參照し、精確を期してゐる。元來中世の商業制度は複雜であり、地方的である。しかしある程度の發展段階に達すると、同じ樣な制度や機關が生れる。本書はその說明の方法にいさゝか分解的に過ぎる傾向があるが、大體に於いて最もよくこれ等の事情を說明してゐる。

D. M. Goodfellow, An Economic History of South Africa, 1931, pp. x., 267.

最近植民地の英帝國內に於ける政治的又經濟的地位が向上すると共に、それ等の經濟史的研究が漸次に多く現れて來るやうになつた。本書もその一つである。本書は南阿弗利加と題してはゐるが、一九一〇年に南阿聯邦を構成した部分の經濟的發展を說明するものである。又年代的に云へば、鐵道が布設され、トランスヴアルの金採掘事業が始められた一八八六年以後を說明するものである。故に初期の大陸的植民には全く觸れてゐない。何人も知るが如く、英國にとつて南阿地方はボア戰爭を最大なるものとして、多額の費用を消費し、又今なほ消費しつゝある地方である。しかし本書の著者はこの點について樂觀的結論を下し、この多額の經費は大部分が生產的なものと見做し得ると云つてゐる。全體を三つの部分に分かち、第一は一八九二年以前の發展について、第二は大體に於いて本書の本論を構成するもので、初期鐵道協定、金發見時代に於ける關稅及び貿易、鑛山發見時代（一八八七年より一八九九年）に於ける農業、一八九〇年より一八九九年に至る歐羅巴人とバンツウ人との經濟的接觸の發展、一八八七年より一八九九年に至る南阿諸國の產業發展、ボア戰爭後の南阿の再建、四植民地の鐵道と財政、復興中の植民と農業、戰後に於ける鑛山及び勞働問題、關稅同盟內の關稅問題等を述べてゐる。第三は最近の發展その他と結論である。全體としていさゝか論文集の觀があるが、最近南阿に於いて問題視された金融問題——殊に金本位制の問題を理解する上にも、その歷史的因由を知る上に有用であらう。

M. Dorothy George, England in Transition, 1931, pp. vii., 229.

London Life in the Eighteenth Century の著者が、ロンドン放送局の依頼に依つてなした放送の原稿に多くの訂正を加へたものである。從つて本書は通俗的讀物として提供されたものである。しかし流石に學究的香りの高い點又適切なる引用はこの時代に關する專門家の著作たることを失はぬ。その中心は第十八世紀にある。古き田園的英國が崩壞して、產業的英國の發生する迄を描かんとするものである。その古英國と近世英國との分水嶺を第十八世紀の中頃に置く。この過渡時代の英國を論じた者は從來とても少なくない。しかし最も研究に困難とされるのは第十七世紀末から第十八世紀初期に至る間である。本書もこの間の說明は少しく不十分である。但し Gregory King, Richard Baxter, Charles Davenant, Defoe, John Locke, Gonzalez 等を捕へ來たつて、農村と田園とを對比しつゝ論究して行くところは頗る巧妙である。著者が都市を論ずるに際し、あまりにロンドンに重きを置き過ぎてゐるのも、蓋しロンドン生活の研究者たる著者として止むを得なかつたのであらう。

Frederic Milner, Economic Evolution in England, 1931, pp. xii., 451.

英國の經濟的發展をその初期から今日に至るまで。簡單に、かつ要領よく知らんと欲する讀者には、本書が最も

適當である。經濟史は人類が自然から生活を確保せんとして努力せる記錄であるとする著者は、筆を原始時代、――石器時代に起し、全體を四時期に分けて說明してゐる。即ちノルマン人の征服以前、中世、國民主義の時代、近世の四期である。文章も簡潔であるし、特に異說をたつることもなく、かつ各章の後に、權威ある參考書を幾つか擧げ、敎科書として頗る適當であると思ふ。普通かうした書物には共通な缺點ではあるが、あまりに種々なる方面を採入れんとしたゝめ、それ等相互の有機的關係を知り得ぬ缺陷がある。本書も又各章に於いて農業、工業、商業、財政、交通、その他を個別的に記述し過ぎた嫌ひがある。しかし各篇の最初に附せる概觀は甚だ巧みに記述されてゐるから、注意深い讀者はその缺陷を幾分救ふことが出來るであらう。著者は英國の將來に對して頗る樂觀的である勿論新進工業國が英國を壓迫しつゝあることは著者も認める。しかし彼は云ふ。エンゲルスが一八四五年に「英國は恐らく二十年大產業國として榮えること出來ないだらうと考へた。英國はもし堅忍不拔と豐富なる資源とを以つてその地位を掴めば、なほ世界發展に於いて活動的部分を占むるを得る。」故に現在の悲觀論の如きは氣にかける必がない。以つて彼の歷史觀の一部を覗ふことが出來るであらう。

Alfred P. Wadsworth and Julia de Lacy Mann, The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780, 1931, pp. xii, 539.

英國に於いて最初に產業革命を經驗した產業として、又近世期に於いて急速に發展した產業として、最も學者の注意を喚起したのは綿業である。　早くからこれに關する研究が發表されてゐる。古くは Richard Guest. Edward Baines から John Kennedy, James Butterworth, James A. Mann 最近では G. W. Daniels 及び Wood と Milmore の共著等がある。しかしランカシャアの綿業發達に關し商業及び產業の全體的視野から學究的研究をなしたものは未だなかつた。尤も前揭の James A. Mann の Cotton Trade of Great Britain は商業的方面から觀察したものではあるが、產業との相關的關係について頗る不十分である。又 Wood & Wilmore の The Romance of the Cotton Industry in England には全體的な記述は見られるが、一つの俗的讀物に過ぎない。その點に於いて本書は一つの意義がある。Wadsworth 氏は主としてランカシャアの產業組織とその背景とを述べてゐる。即ち第一篇一七〇〇年以前に於けるランカシャア織維工業の發達及び組織、第三篇資本主義的組織及び企業（一七〇〇――一七七五年）、第四篇工場制度以前に於けるランカシャア賃銀勞働者の三篇が同氏の執筆にかゝる。第三篇第十八世紀に於ける綿貿易の發達、第五篇機械紡績への變移の二篇が Mann 孃の執筆で主として商業的方面に力を注ぐ。その產業發展の根本的見解は George Unwin に據るところ多いやうである。Unwin のこの時代に關する觀察は最も明解である。（Economic Organization in the Eigteenth Century）。その影響を受くるのは當然であらう。本書が二人の違つた目的から研究せる人に依つてなされたことが、往々にして記述の不統一を生ぜしめてゐる。しかし初期の綿業發達史として、現在吾人の手にし得るものゝ中、最も優秀なるものであらう。唯綿業史の研究に關しては、初期この時代のものは頗る多いが、この以後について甚しく乏しいやうに感ぜられる。

E. Lipson, The Economic History of England, II. & III. The Age of Mercantilism, 2 vols. pp. vii., 464, v., 542.

本書は Lipson 敎授の英國經濟史中世篇の續篇である。エリザベス女王即位から產業命革前に至るまで、近世初期を取扱つたものである。前卷は工業、外國貿易、の農業の三章からなり、後篇はマアカンタイル制度、產業の統制、及び救貧法の三章からなる。かうした取扱ひ方に多少異議はなくもないが、こゝでは問題外として置く。中世篇に

於いて現れてゐる著者の愼重周到なる資料の取扱ひぶりは本書に於いても隨所に見られた。この點に於いて吾人は本書から得るところ頗る大である。從來英國經濟史に於いてこの時代を相當詳細に記述したものとしては Cunningham 及び Brentano の英國經濟史ぐらゐなものである。前者は多くの資料を提供しては呉れるが、經濟史としてはやゝ體裁整はざるの憾があり、後者は外國人の著作であつて資料に於いて缺くるところ少なくない。その點に於いて本書は從來の缺陷を補ふものである。資料は豐富に引用されてはゐるが、少しも讀者をして資料のために全體の議論の發展を解らなくさせてしもうやうなことはない。それ等の點は流石に老巧である。結論も概して穩健である。例へばマアカンチリズムの定義を論じても、徒らに定義のための定義に走ることがない。（第三卷一―二頁）。

A. Loveday, Britain and World Trade. 1931, pp. xxi, 229.

本書を經濟史の中に入れて紹介することは多少躊躇されるが、すでに今日では世界大戰後をも經濟史中に取容れることが少なくないやうであるから、敢てこゝに簡單に紹介して置かうと思ふ。本書は著者が "The Nineteenth Century and After" その他に寄稿せる論文集である。歐洲大戰より現在に至るまでの經濟的恢復を述べ、英國の世界貿易に於ける地位が漸次衰頽せる狀態を指摘し、これが恢復策に論及してゐる。英國の貿易上の勢力減退の主たる原因を、主として國內に於ける生產費の高きこと、生產技術の劣惡、並びに外國の競爭、殊に獨逸及び合衆國、アジアに於ける日本を擧げてゐる。普通强調されてゐる爲替ダンピングはあまりに誇張され過ぎてゐることを指摘してゐる。全體の論調は頗る明快であり、大戰後の英國經濟狀態の變遷を知る上に、後に紹介する G. D. H. Cole の著書と共に參照する價値がある。關稅對策等について、現在世界の問題となりつゝある諸經濟問題の參考ともなる。

W. Marston Acres, The Bank of England from Within, 1694-1900. 2 vols., 1931., pp. xvi., 666.

英國の銀行史の著述は決して少なしとしない。比較的新しい著述としては R. D. Richards の The Early History of Banking in England, 1929. 等があるが、それ等の銀行史は何れも多くの部分を英蘭銀行に費してゐる。又英蘭銀行だけの歷史も Thomas Fortune, John Francis, A. Andreades 等頗る多い。殊に最後のアンドレアデスの著作は英蘭銀行史として古典的意義を有する。最近町田義一郎氏の邦譯成り、一般讀者にとつて大なる便宜が與へられた。これ等の諸書は何れも主として英國經濟史、殊に財政史、金融史全般から見て英蘭銀行の重要性、職能等を記述せるものである。然るに Aces 氏の新著は表題の示すが如く、英蘭銀行そのものを中心として、英蘭銀行所藏の原資料を一々檢討して述べたもので、この點に本書の特異性がある。從つて從來の英蘭銀行史に見られない多くの資料が提供されてゐる。殊にその挿入せる數十葉の寫眞には頗る珍しいものがある。全體を六期に分かち、銀行創立期、食料雜貨商ホォル時代、スレッドニィドル街移轉一七三四年より一七九三年まで、一七九七年より一八二一年まで（以上第一卷）、一八二一年より一八四四年の銀行條令まで、一八四四年より一九〇〇年までの六期である。この種の著作としては比較的讀みよいことも、その特徵の一つに算へてよからう。

J. H. Clapham, An Economic History of Modern Britain, 1850-1886., 1932., pp. xiii., 554.

本書は一九二六年に公にされた同氏の近世英國經濟史の第二卷である。前卷初期鐵道時代と題し、一八二〇年から一八五〇年まで記述された著者は、その後約四十年間を自由貿易及び鋼鐵の時代と題して發表さるゝに至つたのである。著者 Clapham 教授の記述は至つて華美でない。又その論述の體系もよく整つてゐるとは云ひ兼ねる。從つて Lipson 氏の著書の如く明快ではない。しかしその該博豐富なる知識を以つて縱橫に論斷さるゝところは愉快

である。先づ第一章に大英國と諸國民と題し、前代に於ける保護貿易が終りを告げ、自由貿易の發展、それに伴ふ各國の產業發展を述べて一種の序論とし、第二章一八五一年の工業界に於いて英國が未だ十分なる工業國たらざることを指摘し、第三章工業的變化の過程、第四章工業組織の發展の二章で近世的工場組織の完成を說明してゐる。第五章交通、第六章外國貿易と商業政策、第七章農業、第八章商業組織、第九章貨幣、物價、銀行及び投資の諸章に於いて工業發展に伴ふ諸產業の變化を論述してゐる。第十章國家の經濟的活動に於いて自由主義全盛期に於ける國家的活動の狀態を說き、その新しき意義を示してゐる。第十一章工業英國の生活と勞働に於いて勞働問題を取扱ひ、八十年代に於ける社會主義運動に言及し、第十二章一八八六—七年に於ける英國の外貌に於いて靜的な觀察をなし、各產業の狀態を略述して結論としてゐる。前述せる如く Clapham 敎授の說明は全體として纒つた觀念を與へるのには適してゐないが、この時代に於ける各階級の生活が如何なるものであつたかを知る上には頗る適當である。かつその說明は從來多くの經濟史に見るが如く、簡單なものではなく、甚だ詳細に記述されてある。私は一日も早くその續卷の出ることを希望して止まないものである。

Anne Ashley, William James Ashley, A Life, 1932. pp. 176.

著者は W. J. Ashley の娘であり、晩年就しく父 Ashley の仕事、又妻を失はれた後、その家庭の雜務をも處理し、老年の父を援助された方である。從つてその父を描かれるや、甚しく親しみある筆致を以つて述べられてある。殊に我々の知らぬいろ〳〵な材料を以つて、この一代の經濟史の大家を描かれてあることは、生前親しくその敎へを受げた者にとつて頗る興味多いものである。私は今それ等の多くの點を一々こゝに紹介する餘裕がないから、唯一つ一般讀者にも興味あると思はれる點を述べて置かう。アシュリイ敎授が經濟學に對して如何なる立場を採らんとしたかの問題である。敎授の態度は早くから—一八八六年頃に—すでに決定してゐた。繪のやうな歷史を描くことも、又抽象的な經濟學にも反對であつた。マルクスの社會主義的學說も誤れるものとして斥けた。即ち云ふ。「私にとつて經濟學者の仕事は(一)經濟史の研究でなければならない——史實は現在にとつて無意義なほど遠くかけ離れたものではない。マルクスもラッサルもこの方面の研究に大なる刺戟を與へた。又(二)個々に(in the piece)近世產業生活を檢討しなければならない。抽象的學說の無益に微細な研究はケムブリッヂの學者達に任せて置ける」。(三三—五頁)。彼は數學を使用したり、濫りに統計を引用することを好まなかつた。この傾向は單に初期のみならず、後期にも及んでゐた。彼の人となりの一端を知り得るであらう。

G. D. H. Cole, British Trade and Industry, Past and Present, 1932., pp. xxiv., 466.

Cole の著作は常に明快であり、氣がきいてゐる。本書は氏の前著 "Next Ten Years in British Social and Economic Policy" と共に、現在の英國の經濟的危機に際し、その解決案を提供せんとして示されたものである。從つて前揭書と共に讀まるべきものである。氏の他の著述と同樣頗る均齊を得た書方をしてゐる。經濟史に關係ある部分は主として第二篇英國貿易史概觀である(三七—二二四頁)。筆を第十八世紀英國商業の優越に起し、產業革命、ヴクトリア朝の隆盛、大不況時代、戰前二十年間、大戰及びその後(一九一四—二一年)の六章に分かつてゐる。第三篇は一九二四—三〇年の戰後に於ける經濟狀態を說明する。第一篇の序論は豐饒と缺乏と題し、先づ現在英國の經濟狀態に對する批評家を五つの種類に分かち、論を進めるあたり頗る才氣に滿ちてゐる。そして第四篇は結論としてソヴィエット・ロシアを比較しつゝ、資本主義制度の一時的安定に必要なる諸條件を提示してゐる。かく概目だけを併記しただけではコォルの才筆を忍ぶことは出來ないが、本書を一讀するだけでも彼が英國讀書界に於い

て人氣ある所以を知り得るやうに思ふ。

Eileen Power and M. M. Postan (ed), Studies in English Trade in the Fifteenth Century, 1933., pp. xx, 435.

英國商業史中、最も不明瞭な時代は第十五世紀である。獨逸のハンザ商人の活動、英國ステープル商人の努力、やがて活躍するマアチャント・アドヴェンチュアラスの狀態、並びに國王財政と關稅政策、――これ等の複雜な諸問題が相互に入込むで、一層不明な點を多くしてゐるのである。本書は纏まつた一つの著作ではない。從つこの時代について首尾一貫せる記述は與へられてゐるとは云へない。しかし卷頭に收めた H. L. Gray の「一四四六年より一四八二年に至る英國外國貿易」に依つて先づ概觀を見ることが出來よう。ハンザとの關係は M. M. Postan の「一四〇〇年より一四七五年に至る英國とハンザとの經濟的及び政治的關係」、又ステープル商人については、E. E. Power の「第十五世紀に於ける羊毛貿易」W. I. Haward の「ランカスタア朝政府とステープル商人との財政的處置」の諸論文に見られる。關稅に關し重要な資料が收錄されてゐる。その外商人團の活躍を示すものとして、E. M. Carus Wilson の「ブリストルの海外貿易」S. Thrupp の「ロンドンの食料雜貨商」の如きが擧げられるが、マアチャント・アドヴェンチュアラスについては、それ等の諸論文中に散見するのみで、纏つた論文を見なかつたことは遺憾である。

Frances Consitt, The London Weavers' Company, vol. I., 1933, pp. xi., 343.

ロンドンに於いて最初に特許狀を與へられたのは織匠組合であつた。一一五五年の早きに與へられた。又ギルドの存在してゐたことも一一三〇以前であつたと云はれる。從つて織匠ギルドの記事は多くの經濟史に現れてゐる。W, C. Hazlitt, The Livery Companies of the City of London, 1892. W. Herbert, The History of the Twelve Great Livery Companies of London, 1837. G. Unwin, The Gilds and Companies of London, 1925 等がロンドン織匠組合を最もよく描いてゐるものであらう。しかし少しく古きに失するか、又は不十分であつたことは止むを得ない。從來大工匠組合、呉服商組合、食料雜貨商組合等についてはそれぞれ組合史があるのに對し、最も古い織匠組合についてその全てがなかつたことは不思議なくらゐである。今本書を得たのは遲きに失すると云へよう。本書はその第一卷で第十六世紀末に至る。組合所藏の原資料について研究されたものである。この時期はギルド發達史上頗る興味ある部分である。都市政府との爭鬪（第一章）クラフト內部に於ける分裂（第六章）等はその主たる者である。殊に織匠組合史としてはフランダアスの優秀なる織匠の渡來に依る影響の如き（第二章）、英國織物業の發達を知る上にも關心多き部分である。それ等の點について何れも詳細なる說明が與へられてゐる。殊に多くの原資料を附錄とし、註記としたのは親切である。

以上現在まで私の一讀又は一覽し得たものゝみを擧げたに過ぎない。この外見るべくして未だ見ざるものが少なくない。例へば A. H. Thomas の編纂せる Calendar of Select Pleas and Memoranda of the City of London, A. D. 1381-1412. (1932) の如き資料や、著述では F. M. Stenton, English Feudalism 1066-1166 (1932) 等の如きである。他日機會を見て紹介したいと思ふ。

（一九三三年六月二十日稿）